

テーマ 歴史の決定的な変化をとらえること

適用分野

日本の古代・中世の歴史



研究名称

平安時代史の研究

氏名所属

佐藤泰弘 教授
文学部 歴史文化学科

内容

● **特徴**

平安時代を中心とした古代・中世史の研究

● **研究内容**

日本における8世紀末期から12世紀は一般に平安時代と呼ばれているが、日本史研究における時代区分では古代から中世への転換期・移行期として理解されている。特に院政期（11世紀末期以降）は中世と考えるのが定説である。しかし、徴税制度や土地制度および地方行政制度や社会関係の構造を緻密に分析するならば、10世紀末期を古代から中世への転換点としてとらえ、その前後の各100年間を古代末期・中世初期として理解することができるだろう。これにより、長らく通説であった王朝国家体制論に代わり、10世紀末期画期説という新しい枠組みを提供することができる。また中世荘園の研究も主要な研究課題の一つである。荘園研究は、法制史家中田薫が20世紀初頭に発表した古典的研究に始まり、枚挙にいとまない。

それに対し、荘園に関する古文書の様式や語彙を検討し直すことによって、荘園や荘園制の定義を更新することを試みている。

問題関心は貨幣と信用に関する分野など多岐にわたるが、研究方法の特徴は文書様式論と語彙研究に基礎を置きながら、構造の変化を把握することにある。歴史研究が細分化していくなかで、研究する対象や時期を広く保持することを意識している。

構造の持続と変化をできるだけ広い時間的・空間的ななかで理解することが歴史学の醍醐味であると思う。そのような姿勢を維持することによって、歴史研究を現代につなげることができると考えている。

キーワード

平安時代、国司、地方行政、荘園、貴族、東大寺

連携方法

■ 講演 □ 研修 □ 研究相談 □ 学術調査 □ コメント ■ 共同研究